

正岡子規の俳句的建築空間



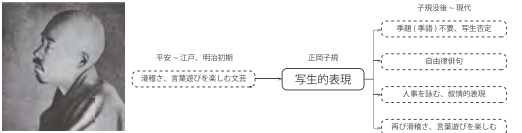
第一章. 研究背景と目的

1-1. 「俳句」と「建築」の親和性



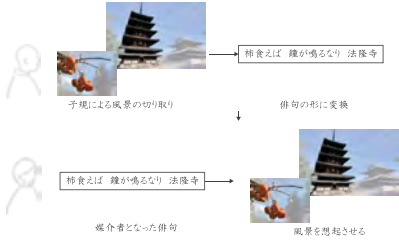
俳句とは世界で一番短い定型詩であり、様々な制約の基構成されるものである。そして建築もまた敷地形状や環境といった様々な制約が存在し、その中で構成されているものである。どちらも「制約」がつきものであるが新たな情景を生み出したたり訪れた人々の心を動かしたりできる可能性を秘めている点で俳句と建築には親和性を感じる。

1-2. 「風景」を題材にした俳人…正岡子規



数多く存在している俳人の中で見た風景をその主題材にし、表現することの豊かさを強調した俳人が正岡子規である。子規の唱えた俳句論は「写実主義」とも呼ばれ、そのスタイルは後にもおなじく存在している。
この「写実主義」は建築にある場所やモノに対して「空間」といって風景を捉える建築にも通ずるポテンシャルを秘めている。

1-3. 俳句とは記憶を想起させる装置



子規の「写実的俳句」は見たままの風景を忠実に作品に落とし込む。そのため時を超えて同じ俳句を詠んだ時、誰でも鮮明に景色を想起させる可能性を秘めている。つまり子規の俳句の分析を行い検知空間に結びつけることで風景の想起装置として働くと考えられる。

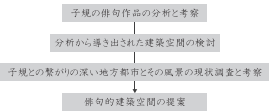
1-4. これからの地方の風景

1950 年～ ①地方的な性格を全く欠いた建築の形態が世界的な規模で普及
②都市と田園の間のコントラストが減少
→大型商業施設やチェーン店が軒を連ねる同様な風景が量産される
オズモス・ヘルツ「日本の風景：西側の景観（一）として風景の時代」（1990 年）

2022 年～ YouTube や Instagram といった SNS の普及により
地球規模での体感的な距離が縮まる

加速するデジタルツールの発展によって見落とされがちな地方都市の風景に目を向けられる時代になると予想される。その時これまでのような合理性を追求した則は魅力的に映らないのではないだろうか？

1-5. 記憶から「風景」のきっかけとなる建築



本研究ではまず子規の俳句作品の分析から「風景」に対する向き合い方を調査する。そして子規の作品と深い関わりのある地方都市を挙げ、俳句作品から導き出した空間要素を利用し、過去を想起させ、今に繋げる「風景」となる俳句的な建築空間を創り出す。

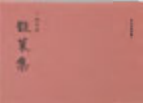
第二章. 正岡子規の俳句作品の分析対象と分析方法についての考察

2-1. 俳句の分析対象

子規が「写実的手法」を俳句作品に反映させ始めた時期は明治 27 年頃からとされている。よって俳句作品の分析対象を

- ①明治 27 年以降に作られた作品であること
- ②風景と俳句が合わせて詠まれたことが明確に分かっている作品であること

の二点に該当する作品に絞る



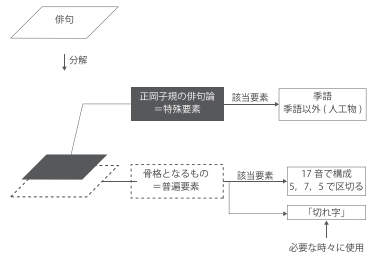
分析対象：『散策集』

明治 28 年秋に正岡子規が松山に療養した際に書かれた記行句集。病後療養中であつた子規が健康維持と俳句制作のため松山市の周辺地区を散策し、その道中に俳句を作つては弟子たちと議論した。著書の中には計 5 つのルートと計 143 句の俳句作品が収録されている。

『散策集』に掲載されているルートと、現在の道とを照らし合わせて実際に歩いてみることで子規の時代の風景と現在の風景を比較する

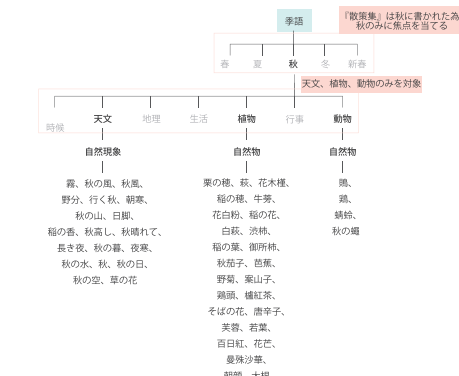


2-2. 俳句の「普遍要素」と「特殊要素」

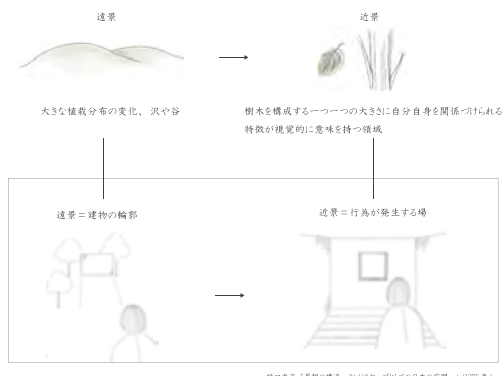


ヘンリー・H・リチャードソンの「建築形態の構造」を参考に俳句を分解すると、子規の唱える俳句論「特殊要素」作者が代わっても変化しない俳句の骨格となる「普遍要素」との二層構造になっていることが分かった。

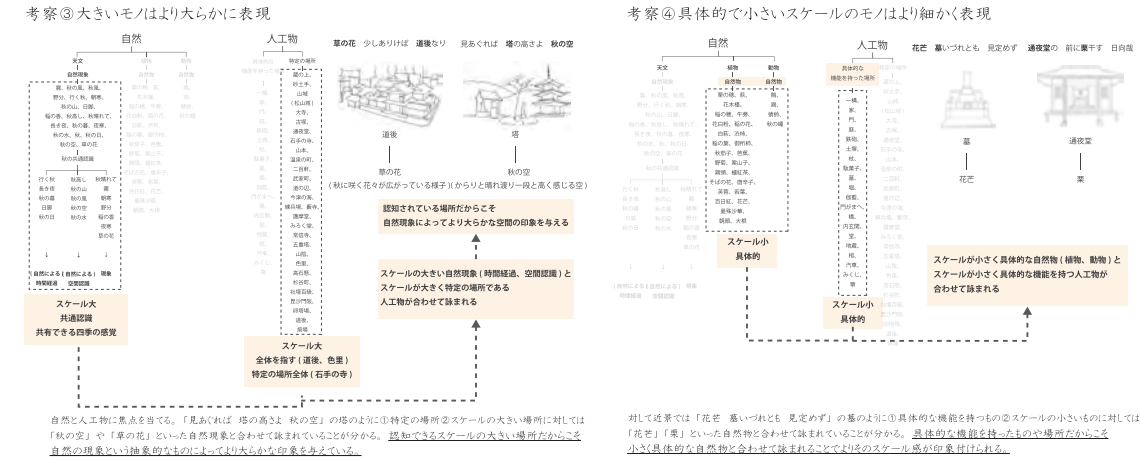
2-3. 正岡子規の俳句論…考察①感情を一切排除、自然物のみ扱う 考察②近景、遠景のみに焦点をあて中景をとばす



「季語」について注目すると、「秋の風」や「秋の山」といった自然現象と、「蕎麦の花」といった植物「鴉」といった動物のみを扱い、行事や感情を表す季語を用いることを咲けたことが分かる。



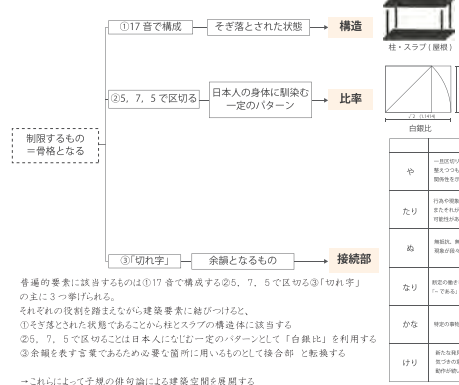
「遠景」とは建築で当てはめると周辺環境の中で見られるモノの輪郭であり、「近景」は一つ一つの大きさに自身を関連づけられる、行為が発生する場を指すことである。



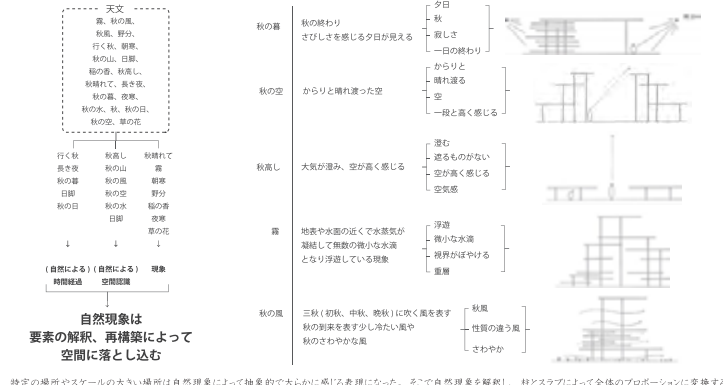
対して近景では「花芒 蕨いづれとも 見定めず」の基のように①具体的な機能を持つもの②スケールの小さいものに対しては「花芒」「栗」といった自然物と合わせて詠まれていることが分かる。具体的な機能を持ったものや場所だからこそ小さく具体的な自然物と合わせて詠まれることでよりそのスケール感が印象付けられる。

第三章. 分析から導き出される建築空間

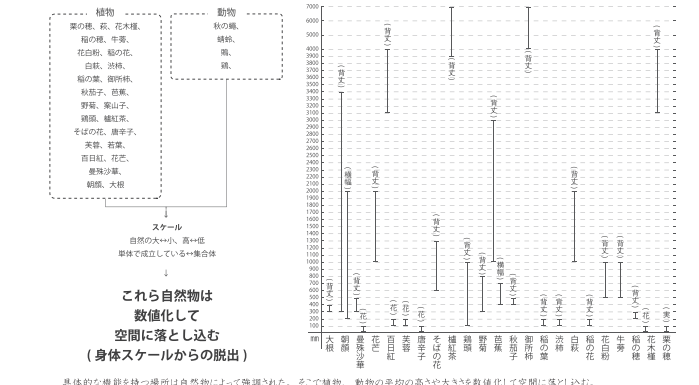
3-1. 俳句の骨格となる普遍的要素



3-2. 遠景…自然現象の解釈によって構成する

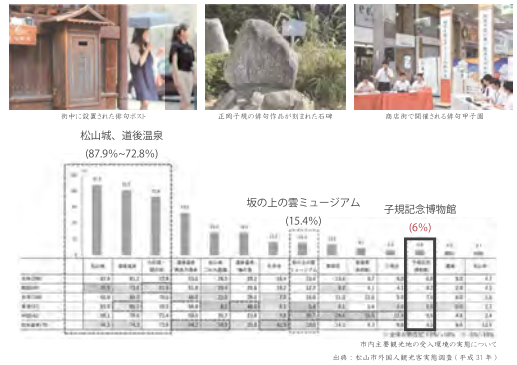


3-3. 近景…自然物の具体的なスケール感を利用する



第四章. 地方都市…愛媛県松山市の歴史と風景に関する調査

4-1. 俳句の街、愛媛県松山市



その子規が俳句革新の拠点とし、好んで街の風景を詠んだとされている場所が愛媛県松山市である。
しかしながら子規関連の施設や俳句の活動はあるものの他の観光地と比べ印象は薄い。

4-2 . 俳句という文学が培われた風土的要因



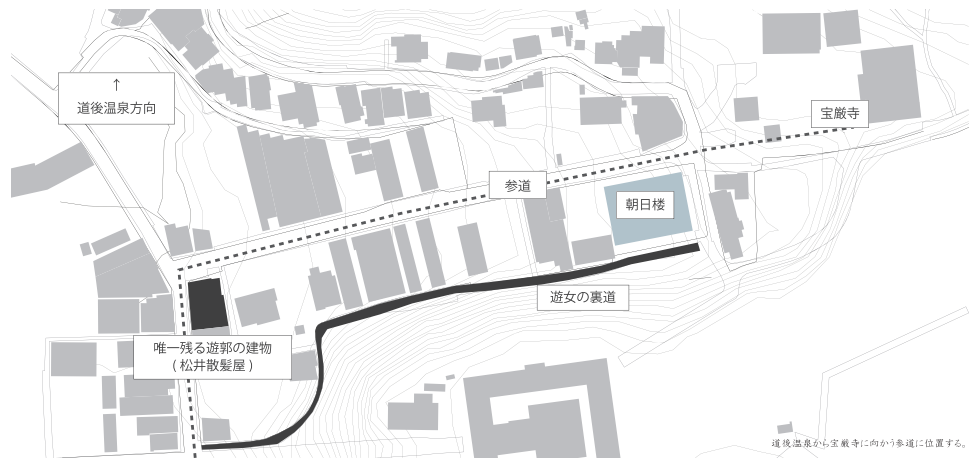
4-3. 戦後の松山



4-4. 子規の散策ルートから浮かび上がる歴史的遺構



5-1. 松ヶ枝遊郭、朝日楼の位置



・過去…松山の花街



宿に並ぶ遊郭の建物



路地と裏道



賑わっていた参道

湯上りの客が通っていたといわれる遊郭。参道に位置していることは珍しく、夏目漱石の小説の中でも紹介された。参道と平行して裏道が存在しており、朝方こもり家に帰るお客や遊女が使った。

・現在…「朝日楼」の消失と参道の衰退



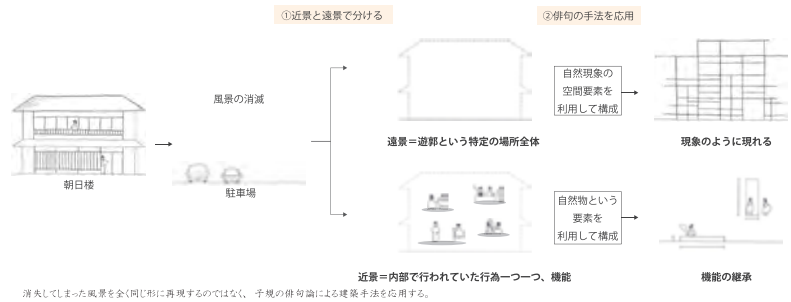
坂を上りきった最後に表れる「朝日楼」



坂を上りきった最後に表れる「朝日楼」

「朝日楼」は松ヶ枝遊郭の中でも特に大きい遊郭であったが、取り壊されてしまい現在は駐車場となっています。

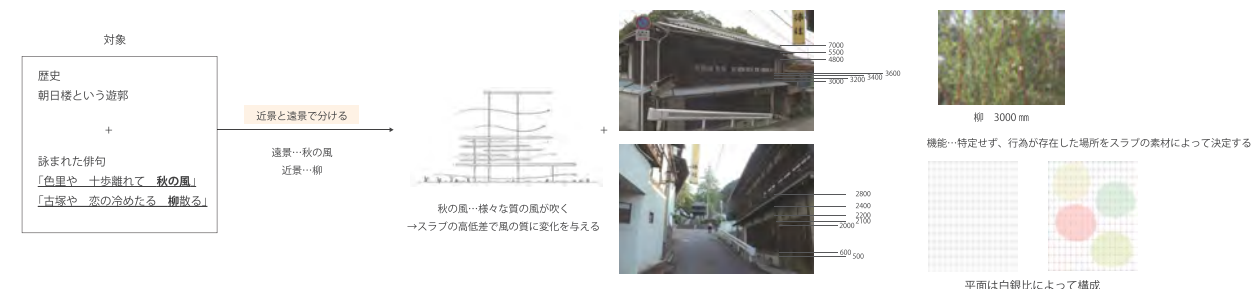
5-2. 手法の活用…消失した風景を想起させる



5-3. 提案

①手法の種となる季節となる季語…予規によって詠まれた俳句から引用

②遠景…「朝日楼」の寸法を引用

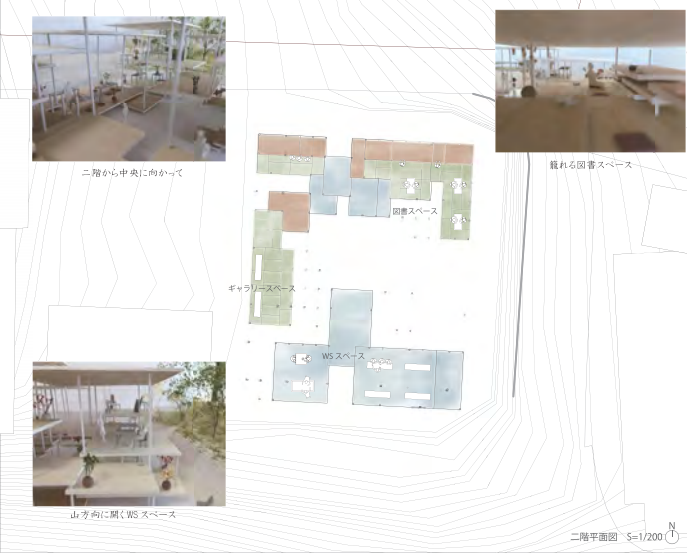
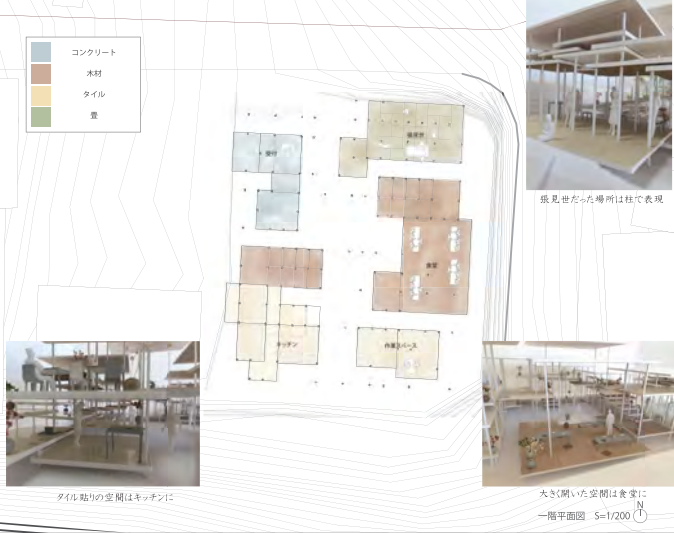


参道を上がっていくとバラバラと高低差のあるスラブの連続による建物が現れ、

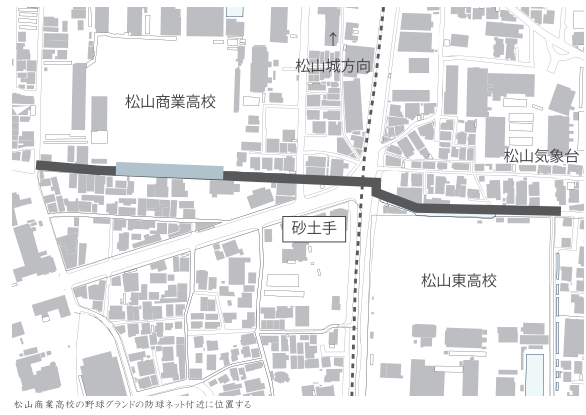


朝日楼

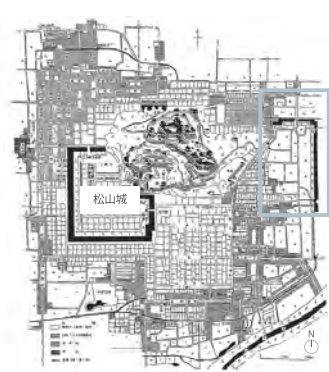
近づにつれて様々なアクティビティが見えてくる



6-1. 砂土手の位置



・過去…築城の際建設された土塁



松山城築城の際、豊臣方の東からの侵襲に備えるために作られた土塁とその土塁を作るために掘られたお堀が南北に伸びている。

・現在…土塁とお堀の消滅と暗渠化

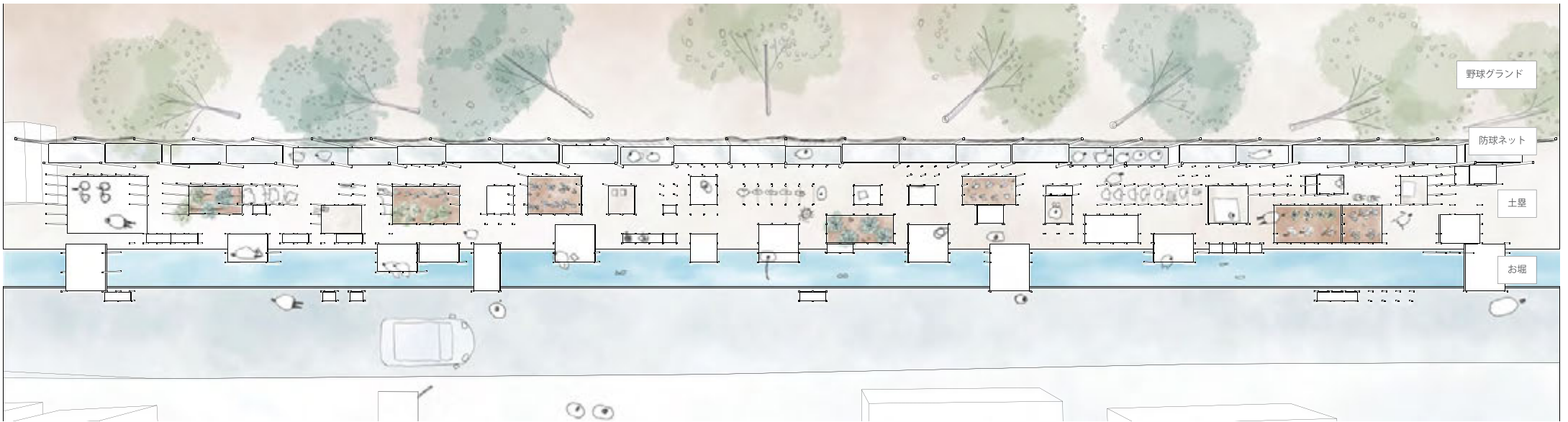


しかしながら時間が経つにつれその姿は変容し、現在ではその姿を見ることはできない

5-3. 提案…朝日楼と同様に手法を適用

① 手法の種となる季語を選択…予規によって詠まれた俳句から引用

② 遠景…「朝日楼」の寸法を引用



近づくと様々なアクティビティが見えてくる



砂土手



お堀を見る



ちよーとしたものを置く



曲を飾ったり



野球を見たり、洗濯物干したり



畑を耕したり